

山口県 徳山市久米

おかのほら

岡原古墳発掘調査概要

1970.7



徳山市教育委員会

協力 山口放送興産株式会社

序

徳山市久米地区は弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が広く残存し、近時、地理的・地質的好条件にめぐまれて急速に開発がすすみつつある地域である。

こうした郷土の発展は、我々市民にとってさまざまな利益をもたらす反面、そのことが自然や文化遺産の破壊につながることも皆無とはいえない現況である。

本報告書に収録された岡原遺跡は、すでに幾度か発掘された形跡があり、また本市が実施した埋蔵文化財重要度調査においてもBクラスにランク付けされていたもので、遺跡周辺一帯が宅地に造成されるにあたり、事前に発掘調査を実施したものである。埋蔵文化財は古い時代の文化を復元するための根本資料として、また文献所載の史実を裏づける物的証拠として、学術研究上欠くことのできないものであり、さらにこれが地域の歴史教育に果たす役割は甚だ大なるものがある。

本市に居住する者は過去をたずね、現在をみつめ、将来への道を求めて行くため、大いに活用いただきたい。

なお、未筆ながら本調査の実施に際し、調査団長の任をお引き受けいただいた山口大学の小野忠源教授、並びに調査員として早朝より日没まで熱心に調査作業にあられた山口県教育委員会社会教育課文化財係の方々、そして終始格別のご協力とご援助をいただいた宅地造成工事の主体者である山口放送興産株式会社に対して深く感謝の意を表する次第である。

昭和45年6月

徳山市教育委員会 教育長 高 木 武 治

は し が き

徳山市久米岡^{キクノガ}遺跡は、昭和42年文化財保護委員会発刊の「遺跡地区」や、昭和31年本市発刊の「徳山市史」に掲載されるなど古墳時代後期に所属する遺跡として周知されていたが、自然の侵蝕や周辺の畑地化などにより、わずかにその痕跡を止めるに過ぎない状態であった。昭和45年2月山口放送興産株式会社によって、遺跡地を含む岡原周辺の宅地化が計画され埋蔵文化財の取り扱いについて相談を受けた。

相談を受けた市教委は、県教委へ行政的手続をとるとともに県教委および工事主体者である山口放送興産株式会社と協議のうえ工事に先立って発掘調査を行なうこととし、調査団の組織については山口大学教授小野忠^{オノタカ}氏に依頼し、下記の調査団を編成した。また山口放送興産株式会社からも発掘調査に対する協力の快諾を得、調査は昭和45年4月21日から4月25日までの5日間にわたり実施され本市の市史に貴重な1ページを書き加えることができた。また発掘調査終了後1か月間にわたり山口放送興産株式会社の協力を得て現地を保存公開し、本市民の文化財に対する認識をさらに深めることができたのもこの調査によるところが大きい。本報告書は小野教授ならびに調査員が執筆し、掲載写真の一部については寺岡・今地（市教委）の撮影になるものを用い、小野教授が校閲して全体を調整された。

徳山市社会教育課 課長 中 村 治 延

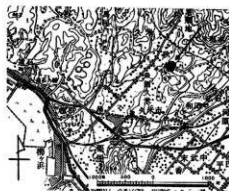
記

調 査 団

団 長	小 野 忠 彦	山口大学教育学部教授
調 査 員	富 士 壁 勇	山口県教育庁社会教育課指導主事
	斉 藤 定	〃
	山 本 一 朗	〃
	松 田 治 登	〃
	森 江 直 紹	〃
	中 司 照 世	
事務担当	寺 岡 明 徳	徳山市社会教育課主事
協 力		山口放送興産株式会社

1 遺跡の位置と付近の景観

この遺跡は、山口県徳山市大字久米字中岡原にある古墳時代後期の横穴式石室である。下松市との間に低い丘陵が南北に数列連なり多くは畑地となり、傾斜地は雑木が茂り、低い谷間は水田や住宅地として利用されている。この古墳の位置するところはこれらの丘陵のほぼ中央にある舌状丘陵の先端に近



遺跡位置

く、標高54m余り・西の水田面からの比高約20mばかりの尾根付近にあり、畑地として利用されていたらしいが現在は休耕され雑地に等しい。

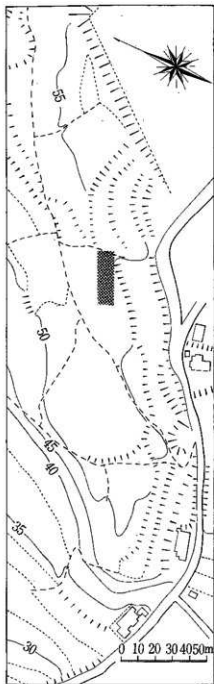
このたび、古墳を含むこの丘陵一帯の宅地化が計画され、調査が開始されたときにはすでに造成工事が行なわれていた。

この丘陵の西側の水田面には、現在久米の集落が立地し、西光寺川をへだてた約800m西の丘陵に、弥生時代後期末、土師器初頭の住居地として知られた老郷地遺跡^①があり、この古墳とほぼ同じ高度に立地していたが、現在は周南団地として削り取られ宅地化されている。

注 ①小野忠憲 山口県徳山市老郷地遺跡発掘調査報告 徳山市教育委員会 1969年



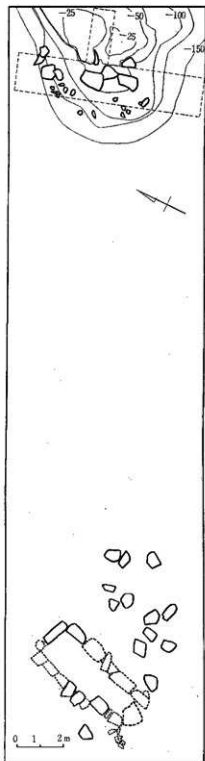
南方からみた遺跡全景 矢印・第1号墳



▲
第1図 遺跡周辺平面図

網口は第2図の範囲を示す

▶
第2図 調査地区平面図



2 調査の経過



調査風景

4月21日 火曜日 はれ

12時現地着。ただちに調査開始。まず遺跡の範囲および遺構の確認を行なった。その結果、従来から知られている2基の古墳とは別に積石塚状の跡の堆積が数箇所認められたが、調査の結果、近年の捨石であることが判明した。したがって、調査対象となるのは封土の一部と東側壁の一部を残した古墳（以後第1号墳とよぶ）と、その西側の封土と石室のほとんどを失い、わずかに石室の基部のみを残した古墳（以後第2号墳とよぶ）の2基の古墳となった。

第1号墳の石室の主軸と考えられる線に沿ってトレンチを設定、一部表土を排除し、これに並行して第2号墳も表土の一部を除去した。

4月22日 水曜日 はれ

第1号墳——露呈した石室側壁に沿って攪乱層を除去。石室の床面であったと考えられるところから、銀環1個と須恵器の破片数個や鉄釘2本を検出した。

第2号墳——表土排除の結果、ほぼ石室平面の全貌が明らかになった。石室に直交するトレンチを入れたが、明確な遺構を確認することができなかった。

また、石室羨道部から東京オリンピックの記念メダルと須恵器の破片が伴出し、床面上50cmまではごく最近掘乱されたことが判明した。

4月23日 木曜日 うすぐもり

第1号墳——マウンド上に石室の主軸に直交するトレンチを設け、封土の状況を調査した。旧地表面と考えられる黒色の腐植土層を掘り出した。石室床面の検出を急いだが、日没のため確認できなかった。

第2号墳——石室内攪乱層の排土を行なった。玄門部周辺に腐植土の堆積層が認められ、これに須恵器や土師器の破片が混入していたが、セメントや磁器の破片が伴出するた

め、最近攪乱されたことが判明した。

なおこの腐植土層は床面にまで達していた。

玄室部も床面まで流入土を排除したが、すべて攪乱されていた。

4月24日 金曜日 くもりのちあめ

第1号墳——石室の床面と考えられるところから、須恵器および土師器の完形品、銀環2個と鉄鍬、勾玉各1が出土した。

また、玄室前部と考えられる地点に礎床の存在したことが確認された。さらに、失われた西側壁の原位置の確認につとめたが、雨のため果せなかった。

第2号墳——石室の平面および断面を実測

した。石室構築の際の地山への掘込みを調査するため、石室周辺にトレンチを設け、掘込みを確認した。

4月25日 土曜日 あめのちくもり

第1号墳——石室奥壁付近の床面から鉄鍬十数本出土。出土状況を実測。石室の西側壁の原位置を推定し、石室の断面および墳丘の断面を実測した。写真の撮影と標本用石材を採取し、第1号墳の調査を終った。

第2号墳——前日の雨によって溜った石室内の水を排出。断面の実測を完了。写真の撮影と標本用の石材を採取し、第2号墳の調査を終った。

3 遺 構

第1号墳

第1号墳の内部主体は付近に産する岩石を利用して構築した南東に開口部をもつ横穴式石室であったと考えられる。

石室の平面形は、西側壁のほとんどが失な

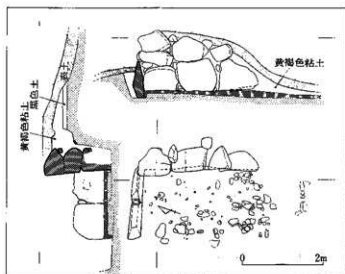


石室部からみた第1号墳奥壁

われているので確かなことはわからないが、現在残っている奥壁と東側壁から推してその玄室は奥行約3m・奥壁の幅1.8mを測る長方形を呈していたものと思われる。

東側壁は、3個の石塊を最下段に置き、その上に1個ないし2個の石塊をやや内傾させながら壁体を構成している。

現在残っている壁体の最高部は、奥壁付近にあり1.6mを測ることができる。



第3図 第1号墳石室、平面・断面実測図

奥壁は高さ1mほどの2個の石材を用いているが、その厚さは側壁のそれと比べると約 $\frac{1}{2}$ で30cmばかりを測るにすぎない。東側壁は地山を1.2m掘り込んで据えられている。これは傾斜のある地形を削ってたいらな床面をつくりだすためと考えられる。封土は東側壁に直角に設定したトレンチの断面の観察によると4層に分けることができた。上から第1層は有機質を含む褐色の表土層、第2層は黄褐色ないし赤褐色を呈し、ところどころに黒色の有機質土を混じえ、これらの下層に赤褐色の地山をおおう厚さ12cmの黒色土層が見られる。奥壁を据えるための掘り込みは第3層の黒色土を切っているため、この第3層が旧地表面であると考えられる。

第2号墳

第2号墳の内部主体は、第1号墳と同じように付近に産出する岩石を用いて構築した南東に開口部をもつ横穴式石室であったと考えられる。石室の平面形は、奥行5.6m・奥壁の幅1.4m・羨道部の幅0.9mを測ることができた。東側壁は5個の石塊を最下段に据えている。西側壁は奥壁前面から3.2mの地点、すなわち袖の部分までは3個のやや大形の石塊を最下部に置き、その上に最下

部よりも小形の石材1個がやや内傾ぎみに積みあけてあった。

袖の部分から開口部付近までは9個の石塊を用いて壁体を構成しているが、袖は高さ1m・幅71



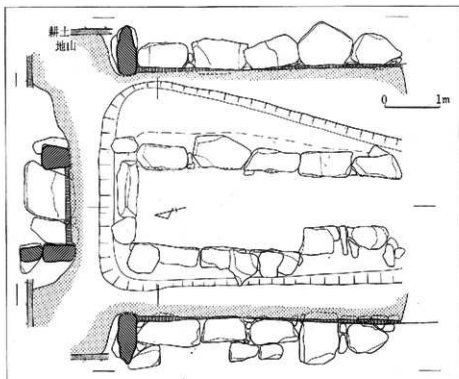
南方からみた第2号墳

cmの石材を縦に用いていた。

床面は、奥壁部に近づくにしたがって低くなり、奥壁は、高さ95cm・幅42cmと1mを跨る2個の石材を用い、地山を80cm掘り込んで据えてあった。

これは第1号墳と同じく、傾斜のある地形を削って、たいらな床面を作りだすためと考えられる。

封土およびその範囲は、両側壁にトレンチを設定し断面を観察したが、開鑿などのため削り取られたらしく、見いだすことができなかった。



第4図 第2号墳石室、平面・断面実測図

4 遺 物

(1) 第1号墳

第1号墳の石室の内部はかなり攪乱された形跡があり、攪乱層からガラス棒、管玉、銀環、鉄釘を検出した。奥壁付近は、そこから検出した鉄鏃等の出土状況から推して、攪乱されることなく保存されていたものと考えられる。

また、石室の南隅と考えられる地点から1個の壺が3個の石で支えられた状態で出土し、その石の直下から勾玉1個を出し、壺に接して直口壺の蓋が斜めになった状態で見出された。



なお本古墳から、かつて刀と壺が出土したと伝えられている。

須 恵 器

坏壺 (第5図-1~3)

上面へらで削られ、復元した時の口径は13cm、焼成・胎土ともに良好である。

坏 (第5図-5)

蓋受がかなり立ちあがっているが、小破片なので器形の詳細は明らかでない。



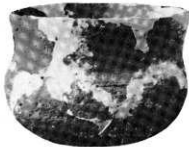
蓋 (第5図-6)

直口壺の蓋と考えられるもので、扁平なつまみがある。大きさは、口径8.1cm、器高3.2cmで、上面はへら削りされている。

高坏 (第5図-7・8)

(7)・(8)は別個体で、(7)にはわずかに自然釉の付着がみられる。(8)は3方にすかしがあり内面にしほり目がみられる。

土 師 器 ・ 土 師 質 土 器



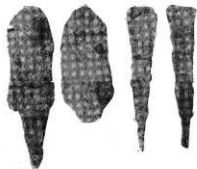
盃 (第5図-9)

完形品であるが、焼成は悪くもろい。口縁部に刷毛による調整痕を残し口径は13cm、器高は10cmである。このほかに土師質の浅い小皿(第5図-4)と糸切底がある。⑩は平底で底部に巻き上げ痕があり、⑪は台付壇で内面に布目、外面に刷毛目と一部自然釉がみられる。⑫は平瓶でへら削りの底部がみられ⑬は碗で底部はへらで削られて平底に近くなっている。(10~13)は胎土、焼成ともに良好で、へら削りは左まわりである。なお(10~13)は徳山市久米出土と銘記され、兼重保氏所蔵のものである。

鉄製品

鉄鏃(第6図-7~15)

(7)は鉄鏃2点が鑿着したもので(7~15)は「方頭広根斧箭式」で(12・13)は「広鋒平造三角形形式」であるが⑧は柳葉に近い。⑨は茎で直交する木目が残る。このほか形態不明の破片が1点あり、少なくとも10点以上が副葬されていたと考えられる。



釘(第6図-16~23)

總数8点でいずれも腐蝕品や欠損品である。

その他

銀環(第6図-4~6)

表面に銀鍍金をした銅製のもので(5・6)はともに直径3.4cm、断面の直径は0.8cmで、セットをなすものと考えられる。

(4)は(5・6)よりわずかに小さく、直径3.3cm、断面の直径は0.8cmである。

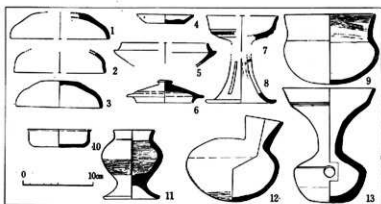


管玉 (第6図-2)

長さ2.3cm, 直径0.8cmの土製で焼成は良好である。

ガラス棒(第6図-1)

長さ2.9cm, 直径0.3cm, 色調は淡い青



第5図 第1号墳出土土器 但し10~13は岡辺出土の土器

であり、その用途については明らかでなく、擾乱土層中から掘り出したため、木古墳に属するか否かは断定できない。

(2) 第2号墳

第2号墳は床面まで擾乱された形跡があり、遺物は床面より浮いた状態で検出された。

須恵器

坏蓋 (第7図-1・2・3・5・7)

(1・2)は口縁部が直角に近く屈曲し、(3)は先端が少し曲がり、(5・7)は、ほとんど曲っていない。大きさはほぼ一定で、口径が12~13cmである。なお、(6)と(8)、(7)と(8)は、それぞれ1セットの蓋と坏になると考えられる。胎土・焼成には差があり、(1・2)は青灰色の精製品、(3・5・6)は、やや質が落ち、(7・8)は胎土・焼成とも粗製で、表面の剝落がいちじるしい。



坏 (第7図-4・6・8)

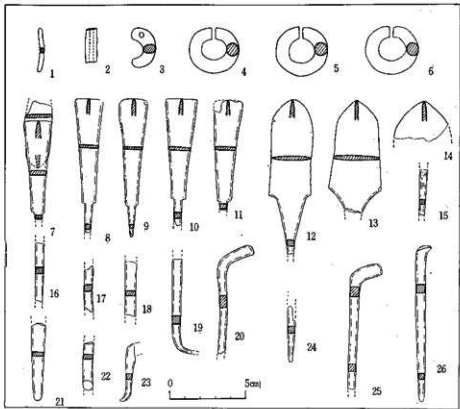
蓋受けのあるもの(6・8)と、ないもの(4)の2種がある。前者のうち(6)は蓋受けの部分の立ち上りがやや長いが、両者とも蓋受けは内傾している。

(4)がもっとも大きく、口径が14.5cmを測り、胎土は良いが、焼成は不良である。



盃 (第7図-10)

口縁部の破片のみで全体を復元し得ないが、口縁部下に明瞭な段を有する点でやや異例に属し、本地方ではこの器形はあまり類例を見ないものである。



第8図 鉄製品、装飾品等実測図

瓦 (第7図-11・12)

あまり外反しない短い口縁部の破片2個がある。いずれも口縁部の下に1条の凹線を持ち、08は口縁部に刷毛による条線がみられる。ともに胎土精良で、焼成も良く、08は青灰色で1部に自然釉が認められる。

高坏 (第7図-15~18)

2個体分を検出することができたが、それぞれに特徴がある。坏部09は口縁部の下位に1条の凹線と、その下に罫目状文があり、先端に近づくにつれて器壁が薄く、かなり立ち上がってくる。これに対応する脚部08は無文で、脚部はわずかに反転し、接地面が広い。坏部07は、前者と比較する

と全体に円味をおび、これに対応する脚部には4個所のすかしがあり、脚部は上下にわずかに拡張されて、先端で接地する。(15・16)は胎土・焼成とも精良で、一部に自然釉が認められ、(17・18)は胎土に砂粒が多く、(15・16)にくらべて質が落ちる。

壺 (第7図-19~21)

口縁部に変化が見られるほかは、球形の器体をもち、ほぼ相似形である。⑨の口唇には1本の紐帯がめぐらされており、紐帯の断面は半円形である。なお、器体下半部にヘラ削り痕を残している。⑩は口縁部がみじかく、内面がすどく切りそがれている点で他の2者と区別される。なお肩部に一条の凹線がある。⑪は口唇の内外にはね上げ状の突起があり、器体の内外面に叩き目が残されている。胎土は3者とも精良であるが、焼成度はいちじるしく異っており、⑩が最も良好で青灰色に近く、⑪は土師質に近い。

土師器

坏 (第7図-9・13)

⑨は蓋受けがあり、明らかに須恵器を模倣したものと考えられるが、胎土・焼成とも不良である。⑬は糸切底で、土師質土器ともいえるものである。遺構や他の出土遺物とはきわめて異質のもので、本古墳の埋葬年代とは直接の関係はつげがたく、後に混入したものと考えられる。

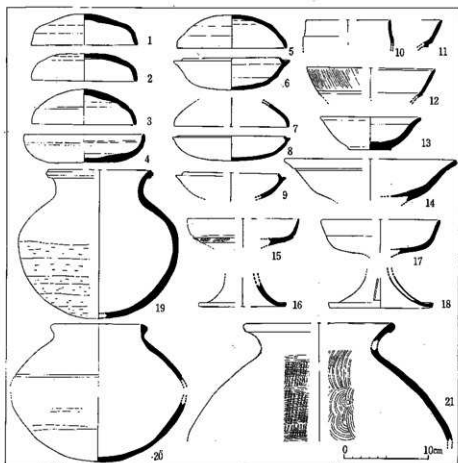
高坏 (第7図-14)

坏部の破片である。口縁部は大きく開き、1条の凹線を有し、内面には焼成時の煤がしみ込んでいる。

鉄器

釘 (第6図-24・25・26)

⑨はほぼ斧形で、その長さは8.3cmを測り、⑩も斧形で長さは10.5cmである。また⑪は頭部を長く折り曲げている。



第7回 第2号墳山上土器

付

岡原第1号墳の東方約10mの地点で発見された遺物一覧

長頸甕	2	土師器 (表紙写真)
盆	1	ノ
高 杯	2	ノ
蓋	1	須恵器 (表紙写真)
蓋 杯	1	ノ (表紙写真)
鉄 刀	1		
鉄 斧	1		
馬 具	1		
鉄 釘	4		

5 要 約 (小野 忠淵)

今回の調査は宅地の造成に伴う事前調査であったが、古墳の損壊がいちじるしく、調査後現地に存置する必要を認めないとの判断から、慎重な発掘調査を行ない記録を永く保存することにした。

以下調査の結果を要約しておくことにする。

- 1 岡原古墳群は、花崗岩丘陵につづく平坦な台地に立地した古墳時代後期の2基の横穴式石室墳である。
- 2 岡古墳とも東南に羨門をもつ円墳であるが、破壊がいちじるしく、第1号墳は天井部と西側の側石および羨道部を欠失し、第2号墳は石室の基部の石槨を残すのみでそれ以上の上部構造物は早い時期に取り除けられ、わずかに平面形態と床面だけが調査できるに過ぎなかった。
- 3 第1号墳は2枚石の奥壁をもつ奥行約3m、その幅1.8mを測り、高さ約2mと推測される長方形の玄室に短い羨道を有し、花崗岩の自然石を一部加工した石塊を積み、ルーズな版築状の封土をもつ通常の横穴式石室墳である。床面のほとんどが後世の擾乱を蒙り、副葬品には須恵器の蓋坏と坏や土師器の壺をはじめ、鉄鏃・鉄釘・銀環および用途不明の小さなガラス棒を検出した。
- 4 第2号墳は第1号墳の西方約26mの地点にある。2枚石の奥壁をもつ長方形の玄室に羨道を付した片袖式の横穴式石室墳で、上部構造を欠くが、第1号墳と同形の円墳とみてよいであろう。擾乱された床面に須恵器の蓋坏・壺・高坏・壺や土師器の坏と鉄釘が遺存した。
- 5 本古墳群は古墳の墳形・内部構造および副葬品等から勘察し、6世紀から7世紀前半の間に位置づけて大過ないであろう。
- 6 第1号墳の地山面の直上、封土の直下に黒色土が存在した。これは徳山市岳山以東に分布する沖積世の黒色火山灰層の時代的下限を示す知見としても重要である。

徳山市久米岡原古墳調査概要

編 集：山口県教育庁社会教育課

発 行：徳山市教育委員会

昭和45年7月10日印刷

昭和45年7月25日発行

印刷 山口市中央印刷